

Os Lusíadas (解説と翻訳) 2

小林 英夫・池上 岑夫・松尾 多希子

5 詩法 (VERSIFICAÇÃO) について

CANTO I から CANTO X までの 10 の歌 (CANTO), 1102 のスタンザ (註1) を持ち、各スタンザは 8 行 (VERSOS) からなるこの OS LUSÍADAS は次のスタンザで始まる。

AS ARMAS E OS BARÕES ASSINALADOS
 QUE, DA OCIDENTAL PRAIA LUSITANA,
 POR MARES NUNCA DE ANTES NAVEGADOS
 PASSARAM AINDA ALEM DA TAPROBANA,
 EM PERIGOS E GUERRAS ESFORÇADOS,
 MAIS DO QUE PROMETIA A FORÇA HUMANA,
 E ENTRE GENTE REMOTA EDIFICARAM
 NOVO REINO, QUE TANTO SUBLIMARAM;

(I, 1) (註2)

主としてこのスタンザを利用して、この叙事詩の詩法を概説することにする。

イ) シラブル

詩の音節は、言うまでもなく、音声学的な音節と常に一致するとは限らない。特に詩の場合各 VERSO の音節の数は、その VERSO のアクセントのある最後の音節までであって、その音節以降の音節は、その存否に関係なくこれを無視して、その VERSO の音節の数の中には入れない。

従ってある VERSO の最後のアクセントのある音節が最初の音節から数えて N 番目にあれば、その VERSO は N 個の音節から成っていることになる。I, 1 の 8 行の VERSO は次のように SILABIFICATION することができる。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
AS	AR	MAS	EOS	BA	RÕES	AS	SI	NA	LA	DOS
QUE	DAO	CI	DEN	TAL	PRAI	A	LU	SI	TA	NA
POR	MA	RES	NUN	CA	DEAN	TES	NA	VE	GA	DOS
PAS	SA	RAM	AIN	DAA	LÉM	DA	TA	PRO	BA	NA
EM	PE	RI	GOS	E	GUER	RAS	ES	FOR	ÇA	DOS
MAIS	DO	QUE	PRO	ME	TIAA	FOR	ÇA	HU	MA	NA
EEN	TRE	GEN	TE	RE	MO	TAE	DI	FI	CA	RAM
NO	VO	REI	NO,	QUE	TAN	TO	SU	BLI	MA	RAM

各 VERSO のアクセントのある最後の音節は全て 10 番目にあるから、この VERSO は全て 10 音節から成っていることになる。このことは単にこのスタンザについてだけ言えるので

はなく、実はこの OS LUSÍADAS の 8816 行の全てにわたって言えることである。つまり OS LUSÍADAS は VERSOS DECASÍLABOS から成っている。

尚、アクセントのある最後の音節でその VERSO が終わっている場合、その VERSO を VERSO AGUDO と言い、アクセントのある最後の音節の次に音節 — 勿論アクセントのない音節 — が 1 つあるものを VERSO GRAVE, 2 つあるものを VERSO ESDRÚXULO と呼ぶ。NA QUAL VOS DEU POR ARMAS E DEIXOU / (I, 7. 7) POR SUBIR OS MORTAIS DA TERRA AO CÉU / (I, 65. 8) が VERSO AGUDO の例で、1-1 の 8 行は全て VERSO GRAVES である。VERSO ESDRÚXULO としては、NO AR LENTO FUMAM GOMAS AROMATICAS, / BRILHAM AS NAVETAS, BRILHAM AS DALMÁTICAS, / (EUGENIO DE CASTRO) がその例であるが、OS LUSÍADAS には VERSO ESDRÚXULO は全くなく、前二者だけである。その中では VERSO GRAVE が圧倒的に多く、VERSO AGUDO は比較的少い。

ロ) アクセント

ポルトガル語の定型詩では、普通 1 音節の VERSO から 12 音節の VERSO まで 12 種類あり、この中では 10 音節の VERSO (VERSOS DECASÍLABOS) が好んで用いられ OS LUSÍADAS がその典型的なものである。

ここでアクセントと言うのは、語のアクセントではなくて、1 つの VERSO を構成している音節の数に従って現れる位置の定まっているアクセントのことであって、これを ACENTO PRINCIPAL (OBRIGATÓRIO) DO VERSO と言い、この位置に現れる音節には同時に語のアクセントがなければならぬ。

OS LUSÍADAS の場合のように 10 音節の場合は ACENTO PRINCIPAL の位置は、

A) ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ (6 音節, 10 音節)

B) ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ (4, 8, 10 音節)

の二種類があり、前者は VERSO HERÓICO, 後者は VERSO SÁFICO と言う。(註 3)

DESEMBARCAMOS LOGO NA ESPAÇOSA¹⁰
 PARTE, POR ONDE A GENTE SE ESPALHOU,¹⁰
 DE VER COUSAS ESTRANHAS DESEJOSA,¹⁰
 DA TERRA QUE O OUTRO POVO NÃO PISOU¹⁰
 PORÉM EU, COS PILOTOS NA ARENOSA¹⁰
 PRAIA, POR VERMOS EM QUE PARTE ESTOU¹⁰
 ME DETENHO EM TOMAR DO SOL A ALTURA¹⁰
 E COMPASSAR A UNIVERSAL PINTURA¹⁰

(V, 26)

I, 1 の 8 行、上のスタンザの 1, 2, 3, 4, 5, 7 行が VERSO HERÓICO で、6, 8 行が、VERSO SÁFICO である。この 2 つの型が OS LUSÍADAS の基本的な形であるが、他にこの 2 つの形の何れにも合致しないものもある。SACRAS ARAS E SACERDOTE SANTO / (II, 15. 2), ROMPENDO A FORÇA DO LÍQUIDO ESTRANHO / (VII, 73. 5), POR FORÇA, DOS QUE O SAMORIM MANDARA / (X, 14. 2) などがそれであるが、この種のは総数に比較すると非常に少なく、この叙事詩は VER-

SOS HERÓICOS と VERSOS SÁFICOS —前者の方がはるかに多い— から成っていると言ってさしつかえない程度である。

ハ) 韻 (RIMA)

ポルトガル語の詩の韻は、韻を踏む部分によって TOANTES, SOANTES, ALITERADOSの3つに分けられる。TOANTES とは VERSO の最後のアクセントのある母音 (音節ではない) だけが韻を踏むもので、BÔCA/BOA, ÁRVORE/PÁLIDO, AVÓ/PALETÓ がその例である。SOANTES または CONSOANTES はアクセントのある母音以下が韻を踏み、ALITERADOS とは連続する語の語頭の子音が韻を踏むもので、VOZES VELADAS, VELUDOSAS VOZES, /VOLÚPIAS DOS VIOLÕES, VOZES VELADAS/(CRUZ E SOUSA) が典型的なものである。OS LUSÍADAS の韻は引用した2つのスタンザからもわかるように SOANTES である。I, 1 では ASSINALADOS/NAVEGADOS/ESFORÇADOS, LUSITANA/TAPROBANA/HUMANA, EDIFICARAM/SUBLIMARAM, V, 26 では ESPAÇOSA/DESEJOSA/ARENOSA, ESPALHOU/PISOU/ESTOU, ALTURA/PINTURA と韻を踏んでいる。

また韻を踏む位置も I, 1, V, 26 からもわかるように ABA BABCC型である。これは ABABAB… と1行置きに韻を踏む RIMA ALTERNADA と AABBC… と連続する2行が互に韻を踏む RIMA EMPARELHADA の組み合わせである。特に8行の VERSOS から成るスタンザの韻がこの組み合わせの時、これは OITAVA HERÓICA と呼ばれており、OS LUSÍADAS の 1 1 0 2 のスタンザは全てこの型の韻である。(註4)

尚、VERSOS AGUDOS が韻を踏む時、これを RIMA AGUDA, VERSOS GRAVES の場合は RIMA GRAVE, と呼び、VERSOS ESDRÚXULOS が韻を踏む時 RIMA ESDRÚXULA と呼ぶ。また前二者が夫々 RIMA MASCULINA, RIMA FEMININA と呼ばれることがあるが、これはフランス語の RIME MASCULINE, RIME FÉMININE を訳したもので、従って RIMA ESDRÚXULA には別の名称はない。

(註1) 各 CANTO の持つスタンザの数は次の通りである。CANTO I—1 0 6, CANTO II—1 1 3, CANTO III—1 4 3, CANTO IV—1 0 4, CANTO V—1 0 0, CANTO VI—9 9, CANTO VII—8 7, CANTO VIII—9 9, CANTO IX—9 5, CANTO X—15 6。

(註2) ORTOGRAFIA は現在行なわれているものに従っているため、EE の ORTOGRAFIA とは異なる部分がある。後に引用する V, 26 も同様。

(註3) ポルトガル語詩における10音節の VERSO の歴史は長い。最も古い時期には、ACENTO PRINCIPAL は4音節目と10音節目にあった。しかし程なくこれとは異なる型が現れた。この型は6音節目にも ACENTO PRINCIPAL が現れる型であり、後にこれが主流となった。その後更にこの定型が破れ、5番目の音節に ACENTO PRINCIPAL の来る型、稀には3番目の音節に来る型も現れた。このように数種の型が行なわれていた頃、6世紀初頭—OS LUSÍADAS の初版は1572年—イタリアの影響で6 1 0型と4, 8, 1 0型が10音節の VERSOS の代表的な型となり現在に至った。

(註4) OITAVA HERÓICA の他に OITAVA LÍRICA と呼ばれるものがあり、これには種々の組合せがある。例えば ABABCDCD, ABBACDDC, ABBCADDC, ABAB

CCCD, AAABCCCD など。

ルジアダシュ (訳 第1回)

1

音にきこえた軍隊と勇士らを、
ルシタニアの西岸を発し
人跡未到の海洋をこえ
いやはてのタブロバーナにまで渡り
人力のことわりをすぎた
はげしい危難と戦闘のただなか
はるけき諸民族のあいだに偉大なる
新王国を建設したかれらを、

注

12 ルシタニア——ただし原文ではここでは形容詞の形 (praia) lusitana と出ている。Lusitânia という名詞形は原文 III 21.5 に初出。ポルトガルの古名および雅名 (スイスを Helvetia というのと同断) くわしくは cf. 解説。

13 人跡未到の海洋 — mares nunca navegados. アフリカ南部をあらう大西洋とインド洋。

14 タプロバーナ — Taprobana. セイロン島の古名。ギリシャ名 Tāprobanē, ラテン名 Tāprobanē, サンスクリット名 Tāmraparnī. このさいごの名称について Webster's Geogr. dict. は "originally the name of district on NW coast, literally 'pool covered with red lotus'" としている。しかし Macdonell の Sanskrit-English dict. はこの固有名詞に „feminine noun of a river (rising in the Malaya and celebrated for its pearls)” の解を与え、その第一成分の tāmra には „adj. copper-coloured, dark red; n. copper” の訳語を与えている。なおこれをスマトラ島に擬する学者もある (Castanheda など)。しかし X 107 で詩人みずからこれを Ceylão と同定している。いずれにせよここでは東洋のはてという気持ち。

16 はげしい危難と戦闘 — em perigos e guerras esforçados. 航海の危険と未知の現地人とのやむをえぬ戦闘。

18 新王国 — Novo Reino. XV 世紀におけるポルトガルのインド帝国 (Estado da Índia) をさす。Vasco da Gama のインド到達 (1498) 後、1505 年初代インド総督 Francisco de Almeida がリスボン港を出帆しインドの統治が始まった。インド帝国は第2代総督 Afonso Albuquerque によってその基礎が固められ、たえまないイスラム教徒との戦闘をへてその領土を拡大してゆき、最盛期にあっては、アフリカ東海岸一帯、ペルシャ湾、インド西海岸一帯、マラッカ、ティモール、マカオをふくむ一大勢力を形成していた。ゴアに総督府をおいたこの広大な帝国をひとりのインド総督が一手に支配していた。東洋貿易を独占したポルトガルには続々とインドの物資が流れこみ、国内の貴族はあらそってインドに官職を求めた。しかしながら、かくもほうだいな領土を人口のすくない一小国が末長く支配しうるはずもなく、やがて統治に欠陥を示しだし、あまつさえ 1580 年本国が独立を失い、スペインの Felipe 王朝のもとに併合されるや、インドへの外國の触手はにわかに動きはじめ、XVII 世紀半ばにはインドはオランダ人の手に移り、XVIII 世紀終末にはさらに一転して英領となり、1835 年には大英帝国の一翼とされるに至った。このよ

うに東洋、とくにインドにおけるポルトガルの勢力は最盛期をすぎた直後、急速に降下していったのである。

2

また信仰と王権をひろげ
アフリカやアジアのよこしまな国々を
平定すべく遠征した王たちの
かがやかしい遺勳のかずかずを、
また武勇のはたらきによって
死神のおきてをのがれた人々を、
うたいあげてその名を海内にひろめよう、
もし靈感と詞藻が予をたすけるならば。

22 よこしまな国々— *as terras viciosas*. キリスト教徒でない住民の土地。

23 王たち— *daqueles reis*. 実際にはアジアの地をふんだポルトガルの王はひとりもない。詩人は Homeros にならって勇士たちを王に擬したにすぎない。

26 死神のおきてをのがれた人々— *aqueles que... se vão da lei da Morte libertando*. 忘却の厄をのがれ、名を末代にのこした人々。

28 灵感と詞藻— *o engenho e arte*.

前者は詩的想像力を、後者はそれに芸術的加工をほどこす能力を意味する。古典詩で、しばしば用いられる対比的表現。

3

かのギリシャの知恵者やトロヤ人の
やりとげた大航海もわきにおけ、
アレクサンドロスやトラヤヌスの
勝利のはまれも打ちもだせ。
名にしおうルシタニア人の功を予が歌う
からだ、
それにはネプトゥーヌスもマルスも三舎
をさけたのだ。
いにしえのムーサの歌もわきにおけ、
いやまさるいさおしが現われるからだ。

31 ギリシャの知恵者— (o) *sábio grego*. Homeros の叙事詩 *Odisseia* (*Odysseia*) の主人公 *Ulisses* (*Odysseus*) をさす。かれは *Ithaka* の王、トロヤ戦争におけるギリシャ方の將軍のひとりで、とくに知謀をもって聞こえていた。戦後トロヤから帰国の途中、海神ポセイドンの怒りにふれ、10年間海上をさまようことを余儀なくされ、かずかずの冒険をする。

31 トロヤ人— (o) *troiano*. 詩人が本編を草するにあたって、内容形式ともにもっとも多く影響をうけたローマ詩人 *Vergilius* の叙事詩 *Eneida* (*Aeneis*) の主人公 *Eneas*

(*Aeneas*) をさす。 *Venus* と *Anquises* の息子、トロヤの公子、トロヤ陥落ののち一族を引きつれて漂泊の旅にのぼり、ついにイタリアの *Latium* に上陸、先住民を駆逐してローマ市を建設することになる。

33 アレクサンドロス— *Alexandro* (*Alexandros*)。大王 (*Magnus*) といわれる。(B. C. 356—323, 在位 336—323) マケドニア王 *Philippos II* の子。ベルシャに遠征、インダス河にいたるアジアを征服し、アレクサンドロス帝国を建てた。これまで対立していたヨーロッパとアジアの二つの世界はかれによって合一され、ギリシャ文化を指導原理として新しい単一世界国家が誕生した。

33 トラヤヌス— *Traiano* (*Marcus Ulpius Traianus*. 53—117, 在位 98—117) 東方およびゲルマニアで軍功をたて、*Nerva* 帝没後即位。内政、属州

政治にも意を用いたが、対外政策では Augustus 帝以来の守勢方針をすて、帝国領の拡大をはかり、ダキアのローマ領化、北アフリカへの進出、シリアの属州化、バルティア攻略、メソポタミア遠征などを通じ、かれの治世においてローマ帝国は空前絶後の版図に達した。

36 ネプトゥーヌス— Neptuno (Neptunus) 海神。ギリシャ神話の Poseidôn にあたる。

36 マルス— Marte (Mars) 軍神。ギリシャ神話の Ares にあたる。

37 ムーサ — Musa (Moûsa, pl. Moûsai)。学問と芸術の女神。Zeus と Mnēmosynē 「記憶」の娘で9人いる。Kleio (歴史), Euterpe (琴歌), Thaleia (喜劇), Melpomene (悲劇), Ourania (天文学), Terpsikhore (舞踊), Erato (恋歌), Polymnia (讃歌), Kalliope (叙事詩)。さてここで「ムーサの歌」というのは、ホロメスやウエルギリウスの詩をさす。

4

さてテージョの精らよ、おまえらは
かつて熱い靈感を授けてくれた。
もしささやかな予の詩章のなかで
おまえらの河が賞め讃えられたとすれば、
いまこそ予に与えよ、崇高なひびきを、
荘重かつ流麗な文体を、
ポイボスの命によっておまえらの水が
ヒポクレネの水を羨まぬようにと。

41 テージョの精ら — Tagides. (=ninfas do Tejo) テージョ (Tejo, esp. Tajo, lat. Tagus) はポルトガル第一の大河。スペイン領を流れるときはタホとよばれる。Albarracín 山脈に発し、西流して Aranjuez, Toledo, Talavera de la Reina, Alcántara の諸都市を、ポルトガル領に入って Abrantes, Santarém をうるおし、首都 Lisboa のある一大河口をへて大西洋にそそぐ。全長 1006 km

(うちポルトガル領内 275 km)。古代においては、ある種の泉や川の水はそれを飲むものに詩的靈感を与える力があると信じられていた。アガニッペ (Aganipe, III 24) やヒポクレネ (Hippocrene, I 48) がそれ。Tagide という語は、Camões と親交のあった詩人 André de Resende (1598 死) が作りだし、サボイア公 Carlos の妃 Dona Beatriz への鎮魂歌のなかで初めて用いられた。

45-6 崇高なひびきを / 荘重かつ流麗な文体を — um som alto e sublimado, / Um estilo grandiloco e corrente. 英雄詩にふさわしい文体の特質を述べたわけだ。

47 ポイボス — Febo (Phoibos)。Apollo (Apollōn) の修飾辞であって「輝く(もの)」という意味をもつ。

48 ヒポクレネ — Hippocrene (Hippokrēnē)。ムーサイの山である Helikon (Boeotia にある) の泉。天馬 Pégasos のひづめが岩を打って湧出させたといわれるので hippo-krēnē 「馬の泉」の称がある。cf. 41 の注。

5

予に与えよ、ひびきよい勇荘な感激を、
農村の葦笛や粗野な横笛のそれではなく、
志気を鼓舞し顔面を紅潮せしめる

52 農村の葦笛や粗野な横笛 — agreste avena ou frauta ruda. これらは田園詩 (poesia bucólica) にふさわしく、英雄詩 (p. heroica) には「りゅうろうた

りゅうろろたる尙武のラッパのそれを。
予に与えよ、マルスの庇護ただならぬ
名にしおう国民の偉業に見合う歌を。
その字内にひろまり渡らんがために、
こよなき値打ちがこの詩章に宿るならば。

6

それから陛下よ、おおルシタニア古来の
生まれながらの自由の保証よ、
それにもまして、微弱なキリスト教の
普及のこよなくたしかな望みよ、
陛下、おおモーロの矛のあらたな怖れよ、
その大半を神にささげるべく
世界を治めるよう神の与えたもう
われらが時代の必至の奇跡よ。

に渡り、Alcacer Quibirにおいて大軍がせん滅、かれは行方不明となった(8月4日)。行年25に満たずに死んだので後つきがなく、大叔父Henrique(1512-80、在位1578-80)があとを襲ったが、2年後に没すると、最近親者であるスペインのFelipe II(ポルトガルではFelipe I)(1527-98、ポルトガルでの在位1580-98)によってポルトガルはスペインに併合されて独立を失うことになる。本編の上木は1572年のことであるから、成稿はそれよりかなり以前に属し、したがって、1554年生まれのD. Sebastiãoはまだごく若く、すでに衰退の兆をみせていたポルトガルの国力回復の新しい希望として、詩人はかれに大きな期待を寄せ、ポルトガル国民の偉業を讃えたこの叙事詩をかれに捧げたのである。

62 生まれながらの自由の保証 — bem nascida segurança da... liberdade. 「生まれながら」とはD. Sebastiãoが王家の出であることをさし、「自由」とは国家の独立を意味する。

65 モーロの矛のあらたな怖れ — novo temor da maura lança. mauro (=moiro)とはMauritânia(Mauretania)の住民の意。マウレタニアとは地中海に面する北西アフリカの広大な土地の古名。現在のモロッコとアルジェリアの大部分をふくむ。「あらたな怖れ」とは、1415年モロッコの要衝Ceutaを攻略し、アフリカ征服の第一歩を印した第10代王D. João I(1357-1433、在位1385-1433)や、アフリカにたびたび遠征隊を送りAlcacer Ceguer, Arzila, Tangerを陥れ、アフリカ王とよばれた第12代王D. Afonso V(1432-81、在位1438-81)と比べたもの。

67 世界を治めるよう — que todo o mande. この接続法のmandeの解釈については諸説が提出されており、帰一するところがない。おもなものを分類してみれば：

る尙武のラッパ」(tuba canora e bellicosa)がふさわしいのだ。Camõesは抒情詩人として出発したが、いまや英雄詩(叙事詩)に転じたのだ。

61 陛下よ — vós. 以下第18聯まで、当時のポルトガル国王Don Sebastiãoあての献呈辞(dedicacão)。出版の允許を得るために主権者などに献呈辞をささげるのは、古来諸国のしきたりであった。本編の献呈辞の部分は詩人みずからがあとから添えたものと思われる。D. Sebastião(1554-78、在位1557-78)はポルトガル第16代の王で、前代の王である祖父D. João III(1502-57、在位1521-57)の放棄したモロッコ征服の夢を狂信的に抱き、1578年夏モロッ

1 主辞 Deus, 対象辞 D. Sebastião. — o qual (Deus) todo o mande. (Claudio Basto および José Maria Rodrigues) この句を一種の挿入句とみ、詩人のひそかな願いを吐露したものとみる。「神があなた (D. S.) に全世界の統治を委任してくれないかな」といったような意味。すると「かれを」という第3人称はそぐわないので、Rodrigues はこれを os の誤植だと考える。ほんらいのポルトガル語ならば vos であるべきだが、それでは韻律が乱れてしまうので、espanholismo の os を使ったのだという。しかし解釈にこずったばあい原文を誤植とみるのは最後の手段でなければならぬ。2 主辞 maravilha, 対象辞 o mundo — ただし que の扱い方について2説あり、a) que = para que (接続詞) mande todo o mundo (Epifânio, Storck, etc.) 「奇跡が全世界を治めるように」と。b) que = a qual (関係代名詞) mande todo o mundo. 「全世界を治めるべき奇跡よ」。3 主辞 Deus, 対象辞 o mundo — o qual (Deus) mande todo o mundo 「神が全世界を治めるように」と (J. A. de Marcedo, Gomes de Amorim, Hernani Cidade)。われわれはこのさいごの解釈をとる。

68 必至の奇跡よ — maravilha fatal. fatal = infalível. 詩人は王が聖戦に打ち勝ってキリスト教をひろめる運命をもって生まれたことに確信をもっているのだ。以上この聯において詩人は呼びかけの相手である D. S. に三つの資質を帰属せしめる: 1 保証, 2 望み, 3 奇跡。

7

陛下よ、よしんば帝王家となえ護教家

となえようと、

およそ泰西に生まれたなんびとよりも

キリストから寵愛された親樹から

すこやかに栄えてている若枝よ、

(そのしるしを陛下の紋所に見られよ、

それは昔日の勝利を示しております。

そこにはキリストが十字架上でうけたも

のを

陛下に紋章として遺しておるのです。)

と自称するようになったといわれている。言い伝えによれば、この勝利は、合戦の前夜かたに現われたキリストに導かれて得られたもので、「オーリケの奇跡」として長いあいだ国民に信じられてきたが、XIX 世紀になってその真実性について、ポルトガル史上最大の論争をまきおこした。この勝利ののち Henriques は、そのときまで用いてきた紋章を、奇跡にちなんで、十字架にかかったキリストの5つの傷を象徴するその数の小さな盾をあしらった現行の新しい紋章に替えたといわれている。次行の「昔日の勝利」(a vitória já passada)とはオーリケの大勝をさす。

7.1 帝王家、護教家 — Cesarea, Christianíssima. ローマ帝国崩壊以来とだえていた「ローマ皇帝」の称号は、法皇による Charlemagne の戴冠 (799) によって事実上認められていたが、Otto 大帝以来 (973) 公式にドイツに属することになった。またフランス王家は XIV 世紀末から Cristianíssimo の修飾辞を伝統的に用いている。

7.3 親樹 — árvore. とは家系譜。

7.5 陛下の紋所に — no vosso escudo.

1139年の Ourique の一戦で Afonso Henriques (cf. 133の注) はモーロ人にたいして勝利を収め、その結果ポルトガル王

陛下よ、強力な王よ、陛下の広大な領土
は

太陽がのぼるとき最初にこれを見

半球のなかほどにもこれを見、

沈むとき最後にこれを見棄てます。

陛下よ、わたしたちは陛下に破廉恥なイ

スマエリタの騎士の、

近東トルコの、そしていまだに

聖き河の水をくむ異教徒の

械となりののしりとなるのを願うのです。

を西に拡大して、1453年東ローマ帝国を滅ぼし、バルカン、エジプトを従え、西欧世界に衝撃を与えた。本編成立当時のオスマントルコはその帝国の最盛期にあり、ここに結集した西方イスラム勢力はヨーロッパ諸国を圧倒し、地中海、黒海、紅海経由の貿易を独占し、富と権益を一手に収めていた。

8.7 聖き河の水をくむ異教徒 — (o) *Gentio que ... bebe o licor do santo Rio*. 「聖き河」とは Ganges 河。この河の水は、ヒンドゥー教徒のあいだに、浄化の力があると信じられている。

陛下のういういしい面ざしに見られる
威風をしばしのあいだ伏せたまえ。

それはとわの神殿に登られるおりの

壮年のすがたをとっておりますが。

慈悲のまなざしを大地にそそぎたまえ、

陛下のいさましい愛国心の

あらたな発露がかならずや

韻文律語に公けにされるのを見られまし

ょう。

8.2-4 太陽が……— 東はインド、ついで赤道のあたり、西はヨーロッパの最西端であるポルトガル本国にまでまたがる。

8.5 イスマエリタの騎士 — *Ismaelita cavaleiro*. *Ismaelita* は *Ismael* の子孫の意。*Ismael* は *Abraham* と *Agar* の息子で、アラビア人の伝説的祖先。ここではとくにマウレタニア (cf. 65 の注) のアラビア人をさす。かれらは騎乗に長じていたので「騎士」という。

8.6 近東トルコ — (o) *Turco oriental*. XIII 世紀に興ったオスマントルコはヨーロッパの一大勢力となろうと考え、着々と領土

9.3 とわの神殿 — (o) *eterno Templo*. とは名声の神格 (*Fama*) の宮をさし、王が壮年 (*inteira idade*) に達したときに不朽の名声を得られることを予言している。

9.8 韻文律語に公けにされる — *Em versos divulgado numerosos*. この *numerosos* は *cadenciados* の意 (音節数によって韻律がきまるから)。 *divulgado* は *Cidade* 校訂本では *-os* と複数形になっているが、初版本にしたがって単数形を正しいとみて上のように訳した。(すなわち、*um novo exemplo ... divulgado em versos numerosos*)。

陛下の見られる愛国心は
 燕雀の志ではなく鴻鵠のそれであります。
 なぜなら祖国の宣揚のために
 名をなすのは燕雀の志ではないからです。
 陛下は見られましょ、陛下を至上とあ
 おぐ

臣民の榮譽のひびきわたるのを。
 陛下はいずれが上かを見分けられましょ
 う、
 世界の王たると、かかる国民の王たると。

ききたまえ、陛下は作りあげたいつわり
 の
 むなしい武勲をもって臣下たちを
 賞めそやすのを見られはしないでしょ、
 虚勢を張るかの異国のムーサがするよう
 に、
 臣下たちのまことの武勲は
 夢物語や伝説のそれにまさります。
 ロドモンテにも、暴勇ルッジエロにも、
 またローランにも、よしんばかれが実在
 したとしても。

編とみられる。

11.8 ローラン — Orlando (fr. Roland の変形)。古代フランス語で書かれた中世の武勲詩 (chanson de geste) の一つ「ローランの歌」(Chanson de Roland) (XII 世紀初頭成立) の主人公。

11.8 かれが実在したとしても — *inda que fora verdadeiro*。原文は、動詞も形容詞も単数形であるから、字義どおりだと Orlando のみを修飾することになる。しかし Rodomonte にせよ Ruggiero にせよ仮構人物であることは Orland●と甲乙はないから、ここは複数形であってほしかったところだが、おそらく押韻とリズムのつごうで単数形にしたのであろう。もっとも「ローランの歌」は多少史実に基いている点で前二者と差をつけてつけ得ないこともないが。

10.2 燕雀の志、鴻鵠のそれ — *não movido De premio vil, mas alto e quasi eterno*。直訳すれば「卑しい報酬に心動かされたのではなく、崇高なほとんど永遠ともいうべきそれに動かされた。」史記の「燕雀安知鴻鵠之志」を利用してみた。

11.4 異国のムーサ — (as) *estranhas Musas*。この聯の下方にあげてある勇士らの歌われている外国の中世騎士道叙事詩。

11.7 ロドモンテ — Rodamonte (これは正しい Rodomonte の変形)。イタリアの詩人 Matteo Boiardo (1441-94) 作 *Orlando innamorato* 「恋のオルランド」(1483 年初編印行、死後の 95 年全編印行) の主人公。

11.7 ルッジエロ — Rugeiro (Ruggiero, fr. Roger)。イタリアの詩人 Ludovico Ariosto (1474-1533) 作 *Orlando furioso* 「狂乱のオルランド」(1516) の主人公。「恋のオルランド」の続

これらの人々のかわりに、忠勇をぬきんでた

勇猛なヌーノなどをお召し下さい。

またエガシュヤドン・フアシュなどを。

かれらのためにこそ

ホメロスの堅琴がほしいのです。

それから十二臣将にかわるものとして

イギリスの十二士とそのマグリーンをお召し下さい。

おなじくかの名にしおうガマを、

かれはアエネアスの名声をかちえております。

12 2 勇猛なヌーノ — um Nuno fero. ポルトガル中興の祖といわれる Dom João I (cf. 13 7 の注) の軍司令官 Nuno Álvares Pereira (1360—1431) をさす。Dona Leonor Teles (cf. 13 7 の注) の従者として仕えた少年時代から豪勇をもってきこえ、ついでアヴィシュ団長 (mestre de Avis) (のちの D. João I) の忠実な友となった。1384 年 Atoleiros の合戦でカスティリャ軍を破り、とくに 1385 年の Aljubarrota 役ではめざましい軍功をたてた。D. João から Condestável の称号をもらったほどである。しかし Ceuta の攻略に参加したのち、あらゆる称号と官職を返上して出家してしまった。1918 年に聖者 (santo) に列せられた。

12 3 エガシュ — Egas. 初代ポルトガル王となった Afonso Henriques (cf. 13 3) の従者 Egas Moniz (1080?—1145?) をさす。かれは Henriques の都 Guimarães がレオン王によって包囲されたとき、都を救おうとしてレオン王にたいし、主人 Afonso Henriques が以後同王の臣下となることを誓い、みずからその保証にたった (1129)。ところが 1 年後、Henriques が誓いを破ってガリシアを侵したので、約束破棄の罪を己れと家族の死をもって贖うため Toledo にレオン王を訪ねたが、王は主人にたいするかれの忠誠にいたく打たれ、その罪をゆるした。

12 3 ドン・フアシュ — Dom Fuas. Afonso Henriques の騎士 D. Fuas Roupinho. モーロ討伐に偉功のあった人物といわれ、いろいろの伝説に包まれているが、真相は不明。

12 5 十二臣将 — (os) Doze Pares. Chanson de Roland (cf. 11 8 の注) にでてくる Charlemagne 旗下の 12 人の近臣 (Paladins)。Ch. de R. 262 に "li duze per" と出ている。かれらはほとんどいつも気の合った同伴者 (compagnon) の対 (pair) をなして登場する。なかでも Roland と Olivier の対がもっとも有名。その他の 10 士の名をあげると、Ivon, Ivoir, Othon, Berenger, Sanson, Anseïs, Gerin, Gèrier, Engèlier de Bordeaux, Gérard de Roussillon.

12 6 イギリスの十二士とそのマグリーン — os Doze de Inglaterra e o seu Magriço. イギリスのランカスター公の娘 Filipa を妃に迎えた Dom João I の御代に (cf. 13 3 の注), イギリスの宮廷で 12 人の貴婦人がひどく侮辱されるという不詳事件がもちあがった。かれらから汚名をそそいでくれるよう求められた公爵は、ポルトガルの娘むこに手紙をかいて援助を要請すると同時に、貴婦人たちもめいめい 12 人のポルトガルの騎士に窮状を訴えた。選ばれた 12 人の騎士たちは海路イギリスにむかうことになった。しかしそのうちのひとりマグリーンは他国を通して陸路イギリスにゆくことを

希望し、日を定めて先方で他の仲間と落ち合うことにした。さて定められた日にマグリーンが到着しないまま、競技場ではイギリス王を迎えて、12人を侮辱した12人のイギリスの廷臣と11人のポルトガルの騎士の間に決斗が始まろうとしていた。その土壇場にマグリーンが姿を現わし、馬や武具の飛びかう激しい戦いのあげく、ポルトガルの騎士たちが勝利を収め、12人の貴婦人の名誉を守った。—この話はしかし歴史的真實性に乏しく、現在までに伝わる印刷物のうち、Os Lusíadas 出版以前のもので、イギリス宮廷にポルトガル人がいったということに触れているのは、1562年刊行の Memorial das Proezas da segunda Távola Redonda「第二円卓騎士武雄伝」のみで、Camões が何に基づいてこのエピソードを取り入れたのか不明である。

127 ガマ—Gama. Vasco da Gama (1469?—1524)。ポルトガルの航海家。第14代王 Dom Manuel I (1469—1521. 在位 1495—1521) の命により、インドへの航路を求め、4隻からなる船隊を率いて1497年7月8日デージョ河口を出帆、ヴェルデ岬(Cabo Verde)をすぎ11月22日喜望峰(Cabo da Boa Esperança)をめくり、メリンデ王(o rei de Melinde)から供されたアラビア人水先案内人にみちびかれ、1498年5月20日インド西海岸のカリクー(=カリカット Calicut)に到着した。これはヨーロッパ人として海路によってインドに達した嚆矢である。翌年帰国、その後1502年および1524年と2回インドに渡ったが、その間に先王のあとを継いだその子 D. João III (1502—57. 在位 1521—57) によって第6代インド総督、ついで第2代インド副王に任ぜられた。1524年、かれは3千の軍を率いてインドに赴き、同年9月5日ゴアに到着、マラバル(Malabar)海岸でのモロ人との戦いは効果を収めたが、12月25日 Cochim で急逝した。

13

それからフランス王シャルルなりカエサル
 なりの
 遺業にひとしいものを求められるならば
 アフォンソー世をごらん下さい。かれの武
 勇は
 いかなる他国の誉れをも暗くしてしまいま
 す。

それからかがやかしい大勝をもって
 国家を磐石の重きにすえた勇士を、
 天下無双の騎士なるいまひとりのジョアン
 を、
 アフォンソ三世を、四世を、そして五世を。

14

わたしの詩章はまた忘れてはおきますまい、

かしこ、しののめの国々において
 勝利の差し物を高らかに揚げつつ
 武功をもって名をなした人々を、
 豪勇無双のバシエーゴ、またデージョ河が
 いまなおその死をいたむアルメイダ父子、
 おそろしのアルブケルケ、屈強のカシュトロ、
 そのほか死神も威力を振えなんだ人々を。

15

かれらをわたくしが歌いますとき(ただし畏
 れ多くも
 陛下を歌い奉るわけにはいきませぬ、非礼ゆ
 えに)
 陛下よ、領国のたづなをとりたまえ、
 陛下は前代未聞の歌にたねを供されましよう。
 アフリカの陸地が、東洋のうなばらが

たくいまれな軍隊と武勇との
大いなる重圧を感じはじめのように、
(全世界が震駭するのように。)

16

おじけづいたモーロは陛下をみつめていま
す、
身の破滅をみてとっているのです。
陛下を仰いだけで野蛮な異教徒は
こうべをくびきへと差し出しています。
ティスも陛下にたいし婚資として
あげて紺碧の所領を用意しています。
というもうるわしい龍顔に魅せられて
陛下を娘むこにと所望しているからです。

17

娑婆に名をえたふたりの祖父のたましいが、
オリュンピアの宮居から陛下を後つぎと見
ています。
ひとりほこがねなす天使の平和のうちに、
いまひよりは血なまぐさい戦争によって名
をえました。
かれらはその武勇の遺業が陛下において
更新されるのを期待しております。
そして齢いの末つかた陛下の席を
至高永劫の神殿内に設けております。

18

しかしながら諸民族の望みますような
陛下の治世がゆうようと過ぎゆくまに
あらたな冒険に寵を垂れたまえ、
わたくしの詩章が陛下のものとなるために。
陛下は見られましよう、陛下のアルゴナウ
タたちが
塩からき銀波をきって進むのを、

怒濤の上で陛下のお目にとまるようにと。
陛下はたびたびの召請に慣れたまえ。

19

人々はすでに大洋を渡りつつあった、
たちさわく波濤を分けながら。
風はおだやかに息づいていた、
へこんだ船の帆をふくらませながら。
海は白い泡でおおわれていた。
そこを神聖な海水をきりつつ
船のへさが突き進んでゆく、
水面をプロテウスの海獣が切っている。

20

折りしもひかりがかがやくオリュンポスでは、
そこには人類の政庁があるのだが、
きら星のように神々があつまっている、
東洋の将来を決しようとして。
うつくしい玻璃の天空をふまえつつ
銀河をこえて馳せ参じたのだ。
はたたがみの命をかしくみ
アトラス翁の孫の召しに応じて。

21

かれらは至高の力の委託にかかる
七天の政務をすておいてきたのだ。
至高の力、それは一片の念力によって
天を、地を、怒れる海を制することができ
る。
着到に及んだ面々をいうならば、
凍てつく北天にすまう神々、
南を治める神々、およびあかつきの生まれ
明るい日輪のかくれる地方の神々。

そこにはウルカーヌスのいかづち振るう
至尊なる父神がひかえていた。
玻璃の星くずをちりばめた玉座の上に
おごそかな、いかめしい王者の風貌、
神々しさがあたりを払っていた。
それは人体を神体に変じてしまうほどであ
る。
こうべには王冠を、手にはダイヤより明る
い宝石の
きらきらひかる笏杖をたずさえていた。

黄金と真珠をちりばめた
ひかりかがやく椅子に、はるかにひくく
他の神々がずらりと掛けていた。
権利と席次のいかに応じて。
(尊敬される長老らは上座を占め、
下位の神々は下座を占めて)。
やおら至高のユピテル、おそろしげな
おもおもしろい音じょうで口を切った。

—「ひかりかがやく星辰の穹窿にある
明るい宮居のとわの住民たちよ、
ルーソの勇猛な国民の大いなるいさおしを
ゆめ念頭から去らしめないならば、
おんみらはとくと承知しているに相違ない、
偉大なる運命神の宿意はなんであるかを。
それはかれらのためにアッシリア、ベルシ
ヤ、ギリシヤ、
そしてローマの人々も忘れ去られよとい
うのだ。

「かれらには、ご承知のように、つとに知
られていた、
かくもささやかな兵力をもって
装備よろしき勇猛なモーロから
しずかなテージュの全流域を召しあげるこ
とが、
ついでおそろしいカスティリヤ人へたい
し、
つねに清朗天の寵をえたのだ。
要するにつねに名声と榮譽をもって
勝利のトロフィーをかちとったのだ。

「わしは語るまい、神々よ、いにしえの武
勲は、
かつてヴィリアートが対ローマ戦において
おのが名をかくも高からしめた
かのロムルスの子孫と争ってえたそれは。
また牡鹿に神意がやどっているとて
ひとをあざむいた異邦人を隊長に
いただいたとき、かの大いなる名が
われわれに強いた憶い出をも語るまい。

「いまやかれらは、ごらんのように、軽舟
に乗じて
さだめなきうなばらを突き進みつつ
用いたことなき海路をとりつつ
南風また南西風の力もおそれず冒険してお
る。
なぜというに、すでに日の長い処も
みじかい処も見えてきた上は
日輪誕生の場所をつきとめんものと
その計画と精魂をつくしているからだ。

「その至高のおきての破られることなき
とわの運命がかれらに約束しておる。
すなわちあかねさす日輪の登場をみる
大海の領有がながの月日にわたることだ。
かれらはきびしい冬を海上にすごしておる。
人々はつかれてもおり死亡者もある。
かれらの望む新大陸をもうそろそろ
示してやってもよい時機ではないか。

「それに、ごらんのように、潮路にあって
七転八倒の苦をなめておるし、
さまさまの天地と気候にもあっておるし、
無情の風の怒りも買っているのだから、

いざこのアフリカの岸辺であたたかく
迎え入れさせてやろうかとおもう。
さすればつかれた船隊を修理しておえて
ながの旅路もつづけられるだろう。」

このようにユピテルは説いたのであった。
神々は席次に応じて答えたが
その言いふんはてんでにちがっていた。
やりとりの理くつもさまざまであった。
居合せたバックスはユピテルの言を
がえんじなかった、というのも承知してい
たから、
もしルシタニア人がそこに渡ったならば
東洋の偉業が忘れられてしまうことを。

〔お断り〕 注は13)までしか掲げてないが、紙幅のかんけいからここまでにとどめた。
次号にのせる。読者の寛恕を乞う。

Sommaire :

Introduction.

Première partie : Les composantes de la Société Thaïe traditionnelle.

Deuxième partie : La Société Siamoise à la veille du Coup d'Etat de 1932.

Troisième partie : Le nouveau monolithisme (1932-1941).

Quatrième partie : Apparition et faillite du pluralisme (1942-1958).

Cinquième partie : Les causes structurelles de l'échec de la démocratie à l'occidentale.

Sixième partie : Les causes extrinsèques de l'abandon de l'expérience démocratique.

Septième partie : Les caractéristiques du nouveau régime.

Conclusion.